

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：26401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K11254

研究課題名（和文）住民による健康な地域づくりを可能にするplace attachmentの解明

研究課題名（英文）Elucidation of place attachments which enable residents to create healthy communities

研究代表者

川本 美香（Kawamoto, Mika）

高知県立大学・看護学部・講師

研究者番号：10633703

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、住民が特定の場所との間で育むPlace Attachmentを明らかにし、住民による健康な地域づくりを可能にするケア技術解明への示唆を得ることである。エスノグラフィの方法論を参考にした質的記述的研究に取り組んだ。本研究の成果は以下であった。（1）Place Attachmentがみられた対象集団が居住する地域の特徴を明らかにした。（2）住民のPlace Attachmentの構造を見出し明らかにした。（3）研究成果を住民による健康な地域づくり実践へと活用した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

人口減少が著しい地域での調査をとおして、住民の場所との精神的・肉体的な結びつきを見出した。Place Attachmentは、人々の日常を成立させる仕組みをもたらし、『社会生活』『健康維持』『命』をつなぐセーフティネットとなり、人々が段階的に地域社会に受け止められる機能を有していた。人口減少地域を生きる人々の地域社会生活を支える実態を記述によって示した意義は大きい。この成果は、人口減少によるコミュニティの縮小・消滅に対応した地域看護（日本地域看護学会定義に基づく2040リサーチアジェンダ24）として、地域が直面する現実を捉えた政策に貢献する。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the Place Attachment that residents develop with a particular place, and to obtain implications for elucidating care technologies that enable residents to create healthy communities. We engaged in a qualitative descriptive study, referring to ethnographic methodology. The results of this study were as follows. (1) We clarified the characteristics of the areas in which the target population showed Place Attachment. (2) We clarified the structure of Place Attachment among the residents. (3) We applied the results of the study to the practice of healthy community development by the residents.

研究分野：地域看護学・公衆衛生看護学

キーワード：Place Attachment 中山間地域 地域づくり 保健師 地域看護学 公衆衛生看護学 人口減少地域

1. 研究開始当初の背景

わが国の高齢化は、世界のなかでも著しい速度で進展しており高齢化から起こる社会現象にどう対応していくか、日本の動向はグローバル社会から着目されている(厚生労働省,2016)。保健医療福祉分野では、地域包括ケアが推進され、都道府県ごとに方策を決定し、広域・市町村単位でも、地域に応じた地域包括ケアの体制整備・運用が進められてきた。例えば、高知県では、その地域特性をふまえ、県民の誰もが住み慣れた地域で、安心して暮らし続けることができるよう、高知版地域包括ケアシステムの構築(高知県,2018)を進めてきた。

主体的な地域活動に取り組む住民に着目すると、地域愛着が高い人は、町内会活動や町づくり活動などの地域での活動に熱心である傾向(鈴木ら,2008)にあり、性別によっては地域に住みやすさを感じている人ほど主観的健康が高い(赤塚ら,2016)ことが明らかにされていることなどから、住民の Place Attachment に着目した。Place attachment とは、個人と場所との間の情緒的な絆(Low&Altman,1992)であり、我が国でも多分野で扱われる概念である。Place Attachment 概念を活用することは、人々の日常にある物理的環境を内包した、住民の社会生活の様相の記述を可能にする。そして、住民の生活に内在する認識や行為をあぶりだし、看護の対象である住民・地域を理解し、地域とその地域に住む住民理解の深化につながることで、地域特性を生かした看護への活用を検討できると考えた。

今回は、成人・高齢者のアタッチメントの特徴を踏まえ、住民のライフステージを高齢期と定めた。また、地域とその地域に住む住民理解の深化を目標とするため、高知県の一地域での Place Attachment の記述を目指した。

2. 研究の目的

中山間地域に暮らす高齢期にある住民の Place Attachment を明らかにすることである。そして、住民主体のまちづくり推進の役割を担う保健師の、地域づくりへのケア技術の開発に示唆を得ることである。

3. 研究の方法

本研究では、(1) Place Attachment がみられた対象集団が居住する地域の特徴を明らかにする、(2)住民の Place Attachment の構造を明らかにする、(3)研究成果を住民による健康な地域づくり実践へと活用する、という研究目標を持って進めた。以上の研究目的と目標に対する本研究の方法は、次のとおりである。

エスノグラフィの方法論を参考に、高知県内の一中山間地域である A 地域において、質的記述的研究を実施した。データ収集は、インタビュー、調査地域に関する書籍・資料調査、参加観察に取り組んだ。データ産出期間は、2019年7月から2023年2月であった。社会状況の影響(Covid-19の流行)によって、調査手段をゲートキーパーや研究参加者と調整のうえ決定したので、調査着手前の研究倫理審査に加え、調査過程にも承認を受けながら進めた(看研倫 19-06、看研倫 20-45)。

データ分析は、まず「調査地の概況」を明らかにして、「中山間地域に暮らす高齢期にある住民の Place Attachment」を明らかにした。「中山間地域に暮らす高齢期にある住民の Place Attachment」の分析プロセスは、2段階のコード化、暫定的カテゴリの生成、カテゴリの生成、テーマの生成、全体像の生成であった。

また、分析結果は、地域住民、地域文化をよく知る専門職、住民組織、看護専門職者、看護学の研究者それぞれに結果説明の機会(計10回)を持ち洗練化させ、真実性の確保に努めた。真実性の確保には、Lincoln & Guba(1989)の看護研究者の真実性の論証(野口,2006;Holloway,1996)の観点をういた。

4. 研究成果

1) 調査結果の概要

研究参加者は、14名であった。インタビューの他、2019年7月以降のデータ産出期間において、毎月の地域状況が掲載される便り、天候による地域の影響、地域行事の開催状況、地域行事に関する知識、研究者が地域をまわる際の季節に応じた注意事項、地域の日常生活に関する情報、保健活動の実際等を教えていただき、文化に接近した。分析対象とした資料は、最終的に32種類であった。これらは、住民や地域関係者をとおして入手したもの、研究者が直接入手のものであった。この他、市町村合併など、研究者が地域理解に必要なと考えた出来事については、書籍や当時の新聞記事を閲覧し、理解を深めるものとして活用した。

参加観察は、地域行事等について、研究参加者をとおして聞き、そこへ出向いて行うことが中心であった。分析の段階が進むにつれて、焦点化したものとなっていくた。

まず、調査地の概況と中山間地域に暮らす高齢期にある住民の Place Attachment を表す6テーマを見出し、これらのテーマがどのように位置づくかを明らかにした。

2) 結果の記述

(1) 調査地の概況

調査地の概況として、1.地域の地勢・気候、2.A地域の成り立ちと地域の人々の生活にかんする9の観点を記述した。9つの観点は次のとおりである。【A地域の成り立ちと地域内の各地区】【人口減少・少子高齢化の進行と定住意向】【人々が受け継ぐ自然・文化財産】【A地域の人々が経験している自然災害】【交通手段の確保と生活水確保の重要性】【少子化にありながら住民と触れ合う子どもたち】【住民とチームで活動する保健福祉専門職】【地域に根付いてきた社会教育】【地域住民をつなぐ住民組織活動】であった。これら9の観点について、記述した。この結果のうち、【少子化にありながら住民と触れ合う子どもたち】、【住民とチームで活動する保健福祉専門職】について、その一部を以下に記述する。

少子化にありながら住民と触れ合う子どもたち

2019年7月現在、A地区人口動態統計によると、年少人口割合は8.4%となっている。同時期のA市と比較すると3.9%低い。地区別にみると、0-15.3%であった(4地区は統計なし)。しかし、住民が集まる地域行事では、日頃子どもたちが学習した成果を発表する機会や、住民が講師となった講座、地域の伝統の踊りの披露、夏祭りや文化祭や地区運動会で、子どもの姿をみることができ、住民と交流する会がある。

住民とチームで活動する保健福祉専門職

A地域に常駐する保健福祉専門職は、医療機関、行政、福祉関連施設に所属する専門職である。このうち行政では、保健師が週に1回から2回、地域内の行政機関に駐在し、そこを拠点に活動している。地域で支援が必要な住民や、住民の活動の場での保健福祉活動は、チームとして活動することが多い。それは、住民が持つ健康課題の解決に向けた対応としてチームで活動するということもあるが、A地域が持つ自然環境によって、1人での活動が危険な場合もあるためであった。例えば、台風や豪雨のような自然災害があると、地面の状況が悪くなり、土砂崩れの危険性や、地区の道路が狭隘道路であること、そして道路に落ちる木の葉や、流れる山の水が交通事故の危険性を高める、というようなことである。また、地域には民生委員があり、民生委員は地域住民の暮らしに沿った活動をしている。そして、各地区には介護予防教室の「お世話役」を担う住民もあり、必要時には連携する仕組みを持っている。住民がケアチームに入ることによって、ケア対象者の暮らしにより沿った支援が展開できるような仕組みがあった。地域の変化もチームで共有することによって、その特徴をふまえた保健福祉活動が可能となっていた。

(2) 中山間地域に暮らす高齢期にある住民のPlace Attachmentのテーマ

中山間地域に暮らす高齢期にあるPlace Attachmentとして、6テーマ(【】で示す)、27カテゴリ(<>で示す)を見出した。6テーマは、【地縁的共同生活と一人ひとりの今の暮らし方との調和】、【この地域での暮らしの仕組みへの関与】、【特別でない普段にある寛ぎと安心】、【地域の実情が編み出す知恵への信頼】、【地域が誇る豊かさがみせる希望】、【これまで残るものを継ぎ繋いできた住民とこの土地に持つ敬意】であった。これらのテーマについて、記述した。この結果のうち、【地縁的共同生活と一人ひとりの今の暮らし方との調和】と【地域が誇る豊かさがみせる希望】について、その一部を以下に記述する。

【地縁的共同生活と一人ひとりの今の暮らし方との調和】

【地縁的共同生活と一人ひとりの今の暮らし方との調和】では、個々の暮らし方に地縁の共同生活が組み込まれていることにみられる結びつきである4つのカテゴリで構成された。それは、<集落単位での暮らしが必要とされてきた土地>、<住民が等しく尊重されるという規範>、<社会生活にある「人それぞれ」という価値>、<人とかがかわる暮らし方の根付き>、であった。

A地域は、かつて盛んであった生業、地理的特徴に影響を受ける自然災害や生活道路、生活水の確保の状況、そして日常の実感として続いてきた人口減少のなかで、<集落単位での暮らしが必要とされてきた土地>である。A地域の高齢期にある住民は、自然が身近にあり影響を受けやすい日常を持っており、年齢を重ねてきたことで、山深い集落での暮らしには誰にも避け難い問題が出てくることを実感している。こういったなかで、住民同士は、共に生活する者として、うまく暮らしていくことができるような人間関係を結んできた。そこで育まれてきたのは、<住民が等しく尊重されるという規範>と<社会生活にある人それぞれという価値>である。これらによって、A地域では住民同士が、途切れないまたはつながりが続く人間関係を保ち、<人とかがかわる暮らし方の根付き>をもたらしていた。

【地域が誇る豊かさがみせる希望】

【地域が誇る豊かさがみせる希望】では、この地域の次世代がつくるA地域の未来との結びつきを示す5つのカテゴリで構成された。それは、<地域の寂しさを潤してきた人々の集まり>、<地域の宝である子どもたち>、<一人ひとりの力の結集がみせる頼もしさ>、<地域が誇るもの

を自分たちの代から次世代につなぐ>、<人とある楽しさを誰にとっても当たり前にした>、であった。

住民が、避けられないことだと捉えてしまうような、厳しい現実を実感するなかで、A 地域には、<地域の寂しさを潤してきた人々の集まり>がある。人々の集まりは、地域に根差してきたものであり、それは現在も生きた場所である。人々が集まる場所を支える主体である高齢期にある住民は、負担となることがありながらも、そこにみる子どもたちの成長や愛らしさに笑顔をこぼす。集う度にみることができる<地域の宝である子供たち>、そして、集う場に関係する<一人ひとりの力の結集がみせる頼もしさ>に感じる地域の未来は、住民の喜びとなっていた。これからの地域の将来が透けて見えるものに自分を重ね合わせ、<地域が誇るものを自分たちの代から次世代につなぐ>、と、今の自分たちにできることをみつけようとしていた。<人とある楽しさを誰にとっても当たり前にした>と、仲間と共に主体的に、確実につなぐ決意があった。このことは、高齢期にある住民の、この地域での生き方を形作るものとなっていた。

(3) 中山間地域に暮らす高齢期にある住民の Place Attachment の全体像

(2)で述べたこれらのテーマの意味を構成する文脈を検討し、中山間地域に暮らす高齢期にある住民の Place Attachment は、共同体次元、個人次元、住民をとおした A 地域の時間軸に、6 テーマが位置づくことを明らかにした。

さらに、各テーマの意味を考察し、「中山間地域に暮らす高齢期にある住民の Place Attachment」を記述した。

2) 研究成果の活用

(1) 考察

以上をふまえ、中山間地域に暮らす高齢期にある住民の Place Attachment の性質、Place Attachment 概念の特性について、地域看護学・公衆衛生看護学の発展に向けて、の3点について考察した。

について、現地との関連、高齢期というステージと地域特性との関連性を確認し、地域内発的な創造性と、受け継がれる地域らしさをもたらすものであると考えた。について、Place Attachment 概念の特性として、概念枠組みに加え、未来に託す希望と、土地と人々と融合する自己を見出した。について、地域看護学・公衆衛生看護学の発展に向け、住民に学ぶことを看護学の知識とすることの重要性を再確認し、住民の Place Attachment を考慮する看護の探求は、地域特性に応じた看護の深化に可能性を持つと考えた。

住民の Place Attachment を考慮し、住民にとっての場所をアウトリーチすることは、直接かわりを持っていない住民へのアプローチを可能にすると考える。このことは、住民の健康につながる包摂性のある地域づくりを志向する看護への発展性が示唆された。

(2) 研究成果の具体的活用に向けて

本研究では、住民の Place Attachment として、住民が暮らす場所に対する精神的・肉体的な結びつきを明らかにした。それは、老化する身体で地理的条件の厳しさにある中山間地域を身体的にも社会的にも住みこなし、住民としての日常を成立させる仕組みをもたらすものとなっていた。このことは、結果として、『社会生活』『健康維持』『命』をつなぐセーフティネットとして機能し、住民が、段階的に地域社会に受け止められていくケア機能を有していた。記述により示したことで、住民の結びつきの強靭さの文脈が浮かび上がった。

本研究成果をもとに、健康づくりへの活用可能性に関して地域住民や関係者との意見交換を行った。そして、人口減少が特に著しい地域において、Place Attachment にみられた住民のケア機能を組み入れた、ICT を活用した健康な地域づくりに向け、多分野・住民で共創して具体的に健康な地域づくりに取り組んでいる。そのプロセスを研究活動の成果として残し、今後の本研究テーマによる取り組みの発展を目指している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 川本美香, 時長美希	4. 巻 45(2)
2. 論文標題 Place Attachmentの概念分析 : 看護への活用	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 高知女子大学看護学会誌	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Mika Kawamoto, Miki Tokinaga
2. 発表標題 Description of Folk Care that Fosters Place Attachment of the Elderly Residents of hilly and mountainous areas of Japan
3. 学会等名 The 25th East Asian Forum of Nursing Scholars Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川本美香, 時長美希
2. 発表標題 看護での活用に向けたPlace Attachment概念の検討 住民による健康な地域づくりを可能にするPlace Attachmentの解明に向けて
3. 学会等名 日本在宅ケア学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	時長 美希 (TOKINAGA MIKI) (00163965)	高知県立大学・看護学部・教授 (26401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------